

日本海大和堆のドスイカの漁場開発と利用

開発調査センター 漁業第三グループ

研究の背景・目的

1. 日本海大和堆で操業する底びき網漁業は、漁獲収入の約 90%をホッコクアカエビ1種に依存しており、漁獲対象種の拡大による安定的な漁業経営を目指す必要性が指摘されていました。
2. そこで、本海域ではほとんど利用されていなかったドスイカ(図1)の資源に着目し、過去の本海域におけるドスイカ調査¹⁾の結果等を踏まえ、商業利用の可能性を確認するための操業試験と漁獲物の販売試験に取り組みました。
3. ドスイカは、日本海、太平洋東北沖、北海道～カリフォルニア沖の水深 300 m 帯に生息する冷水性のテカギイカ科ドスイカ属のイカです。身が柔らかくて鮮度落ちが早いため、現状では市場価値が低く、その流通消費は地元に限定されることがほとんどです。日本周辺ではドスイカ属は3種が報告されていますが³⁾、これらは外見では識別できないので、本調査ではまとめて“ドスイカ”と称します。
4. 現在、スルメイカの不漁によって国内のいか類加工原料の不足が深刻化しています。ドスイカの供給は、いか類原料不足の改善にも役立つと期待されます。

研究成果

1. 兵庫県浜坂漁業協同組合所属の沖合底びき網漁船2隻をチャーターし、令和6年6月6日～7月12日の37日間に操業試験と販売試験を実施しました。
2. 操業試験は大和堆全域で実施しましたが、漁獲量がまとまったのは大和堆の西部海域でした(図2)。操業水深は284～500 mでした。総漁入網量は74トンであり、操業日数37日で除すとドスイカの1日1隻あたり平均漁獲量はおおよそ2トンと見積もられました。
3. ドスイカに適した漁具の改造も視野に従来漁具を用いて操業試験を開始しましたが、ドスイカは問題なく漁獲でき、漁具の改造は必要ないと考えられました。また、ドスイカは昼間に漁獲がまとまるため、主に夜間に操業するホッコクアカエビ漁との両立も可能であることが確認できました。
4. 販売試験では、船内で凍結したブロック凍結製品は300～400円/kg、一本凍結製品(IQF)は600円/kgを

超える価格で販売できました(図3)。凍結時に手間がかかりますが、収益向上のためにはIQF製品を増やす努力も有効と考えられました。混獲物としては価値が低いドスイカですが、漁獲がまとまり、鮮度よく凍結することで市場価値が向上しました。

5. 期待される漁獲量と販売価格、ホッコクアカエビ漁との兼業の容易さ等から、地元漁協はドスイカ漁の兼業による収益が見込めると判断しました。

なお、本種の持続的な利用に資するため、開発調査センターでは引き続き本種の利用実態に関するモニタリング及びその生態研究を継続します。

アウトカム

1. 操業試験と販売試験の結果を受けて、試験終了直後から兵庫県、石川県の沖合底びき網漁船が大和堆におけるドスイカの商用操業を開始しました。
2. 浜坂漁協はドスイカを「大和イカ」ブランド化して販売促進に成功したほか、原料購入業者が加工品の製造販売に繋げ、株式会社フーディソンは関東圏で、株式会社万代は関西圏で販売を行っています(図4)。
3. 第22回シーフードショー大阪(令和7年2月19～20日)に出展し、実際の操業にあたった漁業者とともに本成果を発表するとともに試食(煮物と炙り)の提供を行い、来場者から好評を博しました。

参考文献

- 1) 服部守男・浅中正禄・安達二朗・北沢博夫・村山達朗(1984)沖合漁場開発調査(ドスイカ資源調査)．島根県水産試験場昭和59年度事業報告，26 - 29.
- 2) 尾形哲男・沖山宗男・谷野保夫(1973)トロール漁獲物からみた日本海における深海生物資源の性状．日水研報告，24，21-51.
- 3) 奥谷喬司(2015)新編世界イカ類図鑑．全国いか加工業協同組合，東京，153 pp.

図1 漁獲直後のドスイカ
(外套長 約25cm)

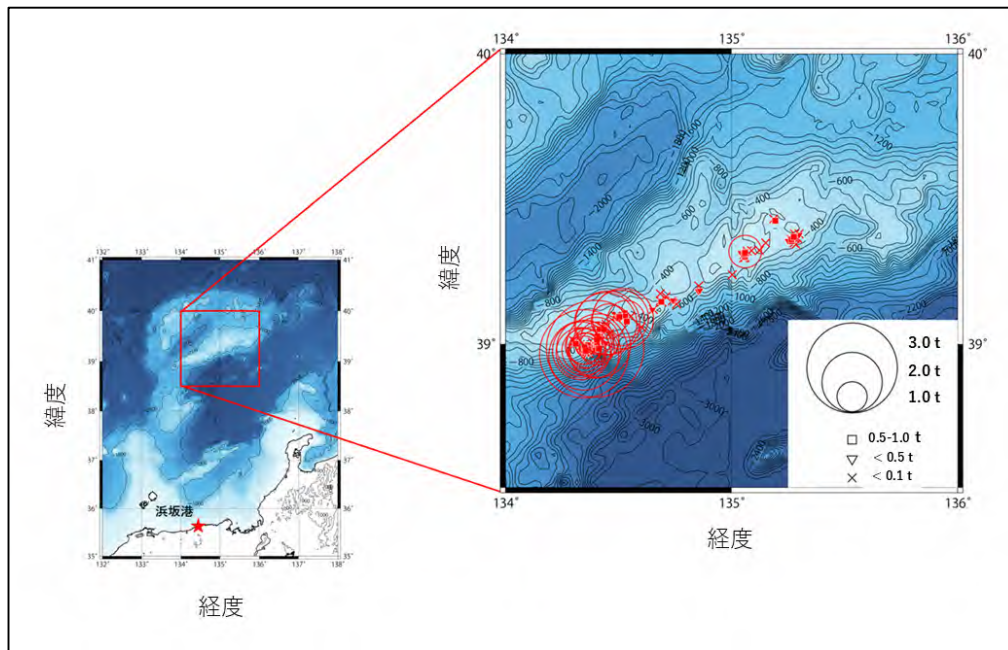


図2 調査海域(大和堆)と漁獲量



図3 ブロック凍結製品(上)と
一本凍結製品(下)



図4 ドスイカ製品
株式会社 フーディソン (左) と
株式会社 万代 (右)